



蘭卷驚奇使客傳  
編三  
貳

~ 13  
3156  
9



へ13  
3158  
9

開卷驚奇俠客傳第三集卷之二

東都

曲亭主人

編次



第二回

金谷の女俠 雙言を殪む

葛城の仙嬢 敬言を昇る

應永十五年戊子の夏五月六日の晡時小姑麻呂姫の仙傳至妙の劍術を  
北山多金閣を投て飛行せし折九六媛の丹方の天を目送り獨點頭する由業  
すやわのける親香爐と推して葛城山の絶頂へ飛鳥の如く立ち登りて品石小坐を  
占めち仰て姑且祈念を凝けりその意念姑麻呂姫の宿望那首の虚かき世を  
累ひたる怨敵と較ぶるて孝義心烈と果さるゝと天神地祇を禱ふ事既に  
九六媛の點燭時候小峯上と下りて徐小姑麻呂姫と等程小這夜初更に比及ぬ  
外面颯と音して窓より内へ入るはわのけり是則姑麻呂姫なりとぞよく猜せし



大正十一年五月二日

二  
三

豆と知止端の邊に立迎て持するり受合さるる扇茶と薦めてしを  
 九六媛の報けの介程は姑麻姫の意氣揚々と古き髪を撥拵て詞餘は答は  
 ひく那里の首尾を鞠ふ姑麻姫の意氣揚々と古き髪を撥拵て詞餘は答は  
 やう奴家飛ひの術を時を移さ北山を金閣に赴け且案内に知人那道  
 と張ひ那首の為体は任々又復雙の趣の箇様々々ゆゆと詳報知は  
 側はゆる豆知止端は俱小奥の心持と膝を杖めうり听く足利相國義満入  
 道の金閣の山城州葛野郡北山の麓なる平林の中在る是より北を大北山南を北  
 山と喚做す京より乾小當れども古より這名あり這地の當初西園寺公經公山莊  
 より心往る心永四年の夏四月義満遠く金閣を造る小泊りて換地をわね他郷  
 親しての身退隱の樂所なる閣は則三層也各金字の匾額あり上より下を數  
 れ第一層の究竟頂第二層の潮音洞第三層の法水院是土木の精工巧緻盡

其樓閣の廣大なる屋棟と宝秋造木と棟小減金の鳳凰ありその高二尺八寸屋  
 棟裏天井柱勾欄威遠なる最上の金鉞の麗れ光輝四下小散徹しく觀  
 る射眼は黄金世現世奉て金閣の御所と喚ぶも以て或は漱清と號する  
 四方縁を懸造りて閣より西の狹戸とを前池あり鏡湖と名く水中処々小菰  
 嶋あり奇石の九八海石夜泊石赤松石畠山石无名石宋の徽宗の嗜む元  
 章が弄ぶ処屈曲名状をて池の廣く底清く春の花散て小松倒れ如  
 秋の月宿りて水秋天秋と疑ふ三尺の鯉魚舶来の金魚波を鯉以水戯は屢高  
 く浮跳るも魚雁鳥鶴鳩の患ひあると知る魚の荷葉を登りて朝日に迎鶴の沙  
 石を以て夕陽の鳴く翠做を行渚の松の颯々として風を吟下亭を竹藩籬の竹を  
 倚々とて雨小戦奇樹異草の種々を通てゆるを音とて集盡るをこの上  
 這宅安民澤の閣の北あり佳々亭の澤の東あり龍門の瀑布化龍の鯉魚石品

下の水銀河の泉三層の浮屠三間半の佛壇の天子の御座御遊の向火玉と鏡  
錦と席と七宝の延満と八珍の美饌小辨を列ねる近臣の勤所遠侍男房  
房の局小至との枚挙の違もあを義満既相國の辭一なる將軍を嫡子義持  
譲りてその祝髪入道と法名道義と稱這山莊の退隱の春秋十回餘  
然とそ寔の隱遁なるが國家の政事大小とあつた沙汰あけり然るに管領四  
職七頭の評定衆御内いけり外様も毎日山莊に出仕と旨と伺ふこと  
佳り程入道相國の四月廿一日より霜露の病着あつて尚其の老政  
各々整案の演衆議の良策もあつて朝夕の脈脈夜毎の宿直誰もあつた  
あつた室町殿の使はれし棋家播紳の訪向日少櫛の齒と挽く御内外様の  
大小名も常より煩く伺候し前宛市の如く諸社諸山の加持祈禱と疎累  
ける驗也五月小至と病着の大抵の瘥りあつた浴湯と端午の節

れり受の... 六月身邊親親青侍の仕へる今茲の暑  
熱の... 五月と父も雨稀れ月牛も月不喘るべし免道より強を寄  
せど池の畔は放散り黄昏時候より宵に姑且筆置てりまゐる御鬱散  
るべし... 二三日前より... 準備  
あり有司奉りて免道も強とくも折く擇採らして萌葱は妙大なる置草  
植水と伏... 日北山の御所まわらせれば法水院也... 時刻と定めらる  
珍... 快楽... 楠姑摩姫の隱形の術... 件の緯... 趣... 送る見り  
... 今... 金閣の斜前庭の樹蔭不立願... 這日暮... 源尊...  
... 女通觀... 折... 屬... 我師の示... 事足... 要

ところを尋思しつゝ腰刀を附れる。小刀子を抜合て件の前竹へ刃先をのり。  
 暴虐雄の上挿の征前年を歴て返さうとみと神多うんと三十一字を鑄着て  
 竟介と笑ひ強敵濕入道相國義満の端近く来ぬと今之と等しうける。  
 俵の程小最長より一夏の日のやうな暮初て入相の鐘は响く時候法水院の  
 檐裏の草の花を画たる。綯張の燈籠と処窄を掛耳たる内許の菊燈  
 臺の銀燭を點したれば明亮とて八隅まで照さる。隈のけの介程小入道相  
 國の近臣より後へ儲の裨は着ある時刻と錯ぬ螢の役人先より池の頭より  
 心小籠の戸を用いて扇を立てて山もあつて或の猿子小籠より螢の囊を解て散ま  
 る。數萬の螢散乱して草子隠れ樹小見光り或の二圍の猛火と見え水小落て颯  
 と碎け流れて激と飛颺る。その事の爲体只是筑石の不識火然然と天上の時  
 星の限り隱れ石小ある。えんがり光景やあつても燃る簞火の鶏川は似る眺め

あり。奇也々と。餘念も主従笑厭置不入りける。浩然お姑麻姫の庭の樹蔭に立  
 出で。突然と縁前より走る近着の聲高き。逆賊義満正可は。我は是賜正  
 三位近衛中将正成卿の爲。曾孫楠河内守橘正元が嫡女姑麻姫。即是我  
 身女流ある。忠臣勇士の魂とて。世も思ひ。君父の讎言と。俱に天地の間小立  
 ん。我推なる。這征箭の汝が。大父尊氏が鎌倉に在りて。叛逆の折。朝廷に向ひ。射り  
 射て。發らる。暴虐雄の前。兒孫は返さ。天の眞罰。世の悖逆。免る。路も受ても  
 足ら。と名告被て。彎を固る。怨の角弓。去る。あれも。仙傳至妙の。是劍術の。所行。えん  
 其首。小入道。近臣の。目。あつた。えん。耳。も。さ。口。義満の。分。明。小。言。の。心。ゆ。れ  
 け。駭。たる。傍。小。撰。る。佩。刀。も。親。會。抗。て。身。を。起。さん。と。せ。れ。処。を。立。も。果。然。は。後  
 姫が。箭。前。聲。耳。尖。く。殺。て。發。せ。て。寬。差。ひ。義。満。の。胸。前。畏。驚。と。射。洞。たる。後  
 方。小。竹。の。年。十。三。なる。小。童。扈。從。の。乳。下。より。背。ま。裏。串。も。中。の。こ。這。主。従。の



大正二年一月

洋松五

五

虎為百獸王  
遇獅子無用  
さし大さの勇虎を

有像第三十



大正二年一月

あまのめ

大正二年一月



是より。六日の黄昏時候。免道より。命を寄ぬる。許りの強と。金園の池に頭を  
 放して。法水院中。亦尚。せし。憶むも。夜氣に感。御惱再發。赤松律師則。孫  
 け。不。最。不思議。折。後。方。なる。童。危。從。赤。松。律。師。則。孫  
 赤松五郎則助。と。喚。做。ま。少年。ける。病。疴。ゆ。て。上。兵。侶。ま。の。坐。と。去。り。暴。死  
 あり。猝。の。奇。怪。是。の。ま。誰。人。か。と。末。ま。け。ん。源。尊。氏。と。朱。來。と。て。寫。し。る。征。前  
 一條御座の頭あり。何とらん。歌。さ。へ。箭。竹。は。彫。着。て。あ。り。け。と。當。直。の。老。輩。二。兩。名。を。我  
 逸。快。く。を。中。と。の。ま。怪。む。の。任。る。東。西。と。披。露。せ。世。の。風。声。の。軍。か。を。疑。ひ。と。信。ふ  
 似。ら。焼。棄。る。小。儀。を。と。り。快。念。秘。し。ら。れ。ば。是。を。知。る。の。言。ふ。と。然。る。方。が。あ。り  
 少。え。ら。北。山。殿。の。御。運。愛。を。冠。位。へ。人。臣。の。上。と。極。め。て。從。一。位。准。三。宮。を。做。升。す。ひ。一。お  
 御。他。界。の。後。幾。日。も。あ。り。又。太。上。天。皇。の。御。號。を。贈。り。あ。り。數。日。の。廢。朝。諒。闇。の  
 異。ね。る。も。御。葬。式。の。嚴。重。る。本。日。の。ま。少。え。ら。も。御。法。號。の。鹿。苑。院。殿。天。山。道。義。公

と唱。せ。ら。ん。年。の。五。十。一。歳。を。介。の。あ。れ。も。室。町。殿。持。の。太。上。皇。の。惶。と。て。辞。以。宣。示。を  
 め。ひ。と。七。枚。の。鹿。苑。院。殿。の。元。年。三。十。八。ヶ。六。月。二。日。相。國。と。辞。の。ひ。て。御。落。飾  
 あり。か。も。海。内。の。政。事。を。新。將。軍。權。不。任。の。ま。御。二。男。義。嗣。卿。を。鍾。愛。の。あ。り。を。を  
 関。白。の。上。座。小。居。と。威。勢。を。示。さん。と。今。茲。の。春。三。月。四。日。の。當。今。後。小。松。を。北。山。の。御  
 金。園。小。行。幸。做。す。幾。日。も。花。宴。の。御。遊。わ。り。萬。支。皆。か。の。如。き。の。隨。小。を。か  
 かの。成。者。必。衰。の。理。を。常。迅。速。の。風。の。與。露。の。玉。に。結。り。命。駐。め。ぬ。と。克。を。惜  
 かの。死。を。免。れ。返。ら。ぬ。皮。甚。重。分。り。あ。る。因。て。北。山。の。金。園。の。義。嗣。卿。を。讓。人。と。逆。仰。せ  
 あり。あれ。が。義。嗣。跡。に。住。せ。る。ま。と。北。山。へ。出。仕。の。大。小。名。員。表。日。の。由。り。も。異。な。り。と。い  
 宛。京。師。の。兩。柱。の。將。軍。と。ま。ま。飲。り。せ。と。佔。ひ。の。勘。と。も。な。れ。も。管。領。斯。波。殿。權。の  
 當。將。軍。と。推。尊。す。嫡。庶。の。差。別。を。立。る。へ。北。山。殿。へ。參。り。の。以。終。は。宣。分。く。る。の。今。と。い  
 左。ま。れ。右。も。あ。れ。鹿。苑。院。の。薨。去。の。り。と。明。朝。も。仰。遣。さ。れ。て。諡。を。諱。め。よ。の。約。尊。大。這



土のわらんの携家清花の大臣より御内侍様の大小名法師巫覡に至るまで食後  
 下と上落して用ひまつらるる。是より當國の守護遊佐殿河内守藤原就盛由京師赴  
 知情報より辯る浮世の噂由山寺入の疎く耳入のからうと姑麻姫  
 又仙術中密多の外亦其頭の噂を那信と竊りて虚実を擇むる言大松  
 美兵衛約七日許経て又分身法を設けて獨を通觀の赴けり師の仙嬢より参りて  
 世の風設草の趣も箇様々と報知といひ身日奴家が北山史義満と共侶射て仆  
 赤松律師則祐孫也赤松五郎則助と喚做るものなる那則祐の  
 當初大塔宮小仕多る元弘二年夏六月十津河の御難の折宮の命を替はるん  
 と稟せしも似て父圓心と俱より氏に従ひて宮の足利直義を弑されり恨と甘む  
 と之賊の股肱と做て一期栄て身故りて則祐の応安四年十一月最朽惜くはひ孫  
 ろりとも射て仆せりある天罰でばるか。あま九六媛點頭て那則祐子の義則を

義則の兄子三郎嫡子の満祐次へ祐之次へ則助次へ義雅と名する侍れり則  
 助の二不も多知なむそのは獨射たれども千枝の中より一葉をかき其をるはあへ  
 記の只安のも堪えん那義満は太上天皇を贈られよ一條のまれば多々歡慮  
 よる出るあめりて武威の憚りの所以を大皇國の八臣として皇位を犯せり  
 中事事情を白徒いひ武家の面目をそ美むる世のあはれを  
 ても義満の僭稱不臣の悪名を後し流る外にあま誓ひ正成義貞の如忠義  
 拔羣るるも陣殺の後南朝也贈官贈位ありける子孫の面目も今  
 足利の勢ひも望み何事遂げざるを其蔽政の致を所此の美むるのあはれ  
 その欲を極めれば必子孫禍害ある事いふて義持の辞稟せり切りの  
 罪滅しあへばさそ明國の君の告を諡と名を采とあり亦義持の罪を免む  
 古の親魏倭王之印ありそ魏倭をえて國史ま吉僭稱の逆臣の唐山倭姫









右又病中絶して久きなりぬ人を親と更ぬの業も進まぬの身今今五  
 月の你的多々正元主の十三回忌又十一月の媽々まある遠忌また五月の辰  
 辰飾と落と佛門に入るあり。一子出家するに九族天の升るとの功德あり  
 あれは眞實な死は這をあらぬので。とられて姑麻姫此も推辞ま御美りゆりま  
 出家の素より情願されども性愚めてその徳をけれ。後住は及びるる合の教を憑  
 りの。とる智正尼歎びて管待常子弥増け。その暁昏の姑麻姫の分根亭か  
 来て御向小智正尼のれと。維盈縫殿們的報知らるる小件の夫婦の眉と頻りめ  
 そいひひ子象のえ出家は功德の然るま。楠氏の御子孫もあつて非除御女子小  
 師まとも。這山院跡を絶て住持と做し何れせん。とて推辞あつた。既約束  
 ありて。後悔の期は達し。か。ま。と。なる。小言語齊一怨まると姑麻姫は微  
 笑て不我身され。と。出家と樂ふあつた。御座の縁と。親小と。伯母君の

教不恃るの不孝然とて。這は埋れ果る。実の親は志違ふ。似る。縦約束あり  
 と。五月まいる。程あり。その期小及びせん。あ。入。只。儘。と。措。ね。か。と。小。夫。婦。の。慰  
 め難。心の。と。り。け。原。の。今。姑。麻。姫。の。如。右。答。て。悔。の。氣。色。の。り。り。の。折。既。先  
 見あり。伯母の尼公の言病ある。その色相は據て思惟。小命數色小竭の悲死か。遷  
 化遠。修。の。早。裏。の。仙。嬢。の。賜。り。の。神。草。這。里。あり。と。小。命。數。既。小。竭。方。人。小。用。ひ。や  
 その效ある。も。あ。つ。た。然。と。その。生。前。小。薦。め。の。出。家。を。推。辞。て。喜。不。恃。り。の。あ。る。也。今  
 の。れ。隨。小。那。美。を。兼。引。け。る。と。遂。り。の。あ。つ。た。と。當。坐。了。竹。簡。を。ち。か。ば。儀。の。と。心  
 た。心。の内。中。哀。戚。の。涙。を。遣。漏。り。け。る。あ。つ。た。那。仙。書。の。妙。奥。と。素。向。衛。生。の。毀。滅。の。人。の  
 知。る。と。も。知。り。の。情。の。地。の。ち。歎。く。と。維。盈。縫。殿。們。の。信。々。と。解。論。さ。ん。の。後。ま  
 ても。黙。止。せ。し。小。不。幸。小。と。先。見。差。の。三。月。の。下。辭。より。智。正。尼。の。重。病。を。犯。さ。れ。て。鍼。灸。兼  
 餌。の。驗。も。あ。ら。ぬ。故。に。姑。麻。姫。の。日。夜。枕。方。後。方。小。ゆ。り。と。看。病。の。困。り。の。ゆ。り。は。

喪時も分根亭へ退らば尚也とて活人草とて親前へ薦められ定業を成す。  
 その効も一既しく智正尼の病着一句許不及びる四月八日の朝姑麻呂姫の枕方口口近  
 着て豫休の祝髪と五月の遠忌と遂に死す。此画餅も露命旦夕の逼り  
 たる候れ且出家の祈を乞てせよ。後住の徒弟の智圓とて逆定められたる今  
 より智圓の後いで讀經と習ひの候か我身稚く一時より脾胃小腹して目も多し漸く  
 瘦衰て命危るけし。三親達の歎かひて當院の本尊地藏井深くも初りぬる。  
 利益無縁て命根も命も留めず。地蔵井深くも女僧せられて四十年徳  
 薄けれども住持の如く如千名の徒弟さあ戒約を成し成就して弥陀の迎を受す。  
 願ふ後世と告て出家の功德と遂に最町寧子告す。最町寧子告す。最町寧子告す。  
 夫の日竟大往生の素懐と遂に生死の人の一呼吸の如し逝のあれは。然りと佛生日下にて愛を遷化表のい美むるえけり。

麻呂姫の哀別の涙乾く隙も。救ふ先見の當りく剃度を免れても免れぬ死  
 喪の悲を遺す方もある歎かす。茶毘安葬の果て初て宿所退りけり。這年  
 智圓尼後住の如く。寄宿の尼も甲乙と交代せしむる。是より寺風變易  
 して。憑一氣をけり。徳而その次の年智正禪尼の二周忌果。比有一日現住  
 智圓尼の隅屋小一郎維盈とその妻縫殿の方丈招きよせて談をせし。何と  
 かりん言改る不似されども。姑麻呂刀祢年来當院の地内住ひの事。先住と姨姪親  
 しさ。ありけり。比より然りも外視不達り。今も生情の漏るる時候る  
 る小容止特小美しけれ。影護する。且和殿夫婦之農僕をどきへ。下と  
 る仕る。後々も舎藏措て。外聞多し。然るとも今速追ひ。追ひ。追ひ。追ひ。  
 和殿們先夫のころ。左も右も。維盈一談不及。仰の趣定。小  
 る。姫上告稟しく。父を仕る。と諾して縫殿も共侶。分根亭へ退り。却姑

まひめ 考墓 祈禱 楠女 残仇 毆撃  
麻呂姫の徳々と院主智圓尼のいれよと送るも報知され姑麻呂姫の歎息と  
を所以あるとあり現住の世才ありて利疎の凶性なる年来我主従の地を塞けり  
賃と出さる處を厭る口状とて争あり幸ひ維盈が購求めたり莊園東へ快く  
其頭宅と造りて退くと軍かめ是より外小思念ありといふ維盈異議も在り  
とも御同意の年來の貯禄あり左も右も仕んと応て次の日智圓禪尼の方丈を對して  
よと報け番匠と聚令寺より十町ある山脚の丸の村稍盡外一座の莊院と造建  
るの久しに至りて土木は工事なすは落成しこの冬の十月の姑麻呂姫の程徒まを住持の  
禪尼同宿の女僧連の人情匿りしに飲ひて舒別と告て維盈夫婦のいへりて奴婢  
農僕と從て八九の新宅の程の日の嗚呼鄙吝なる智圓尼の言と設て今より後ま  
分根亭の儲賃と云く合まき欲せしその緯を多く品詰ひて姑麻呂姫主僕等  
去りければち咳くの腹を立て人も報をのるべし只喫酢とのをどひける。

第二十四回 考墓 祈禱 楠女 残仇 毆撃  
却説楠姑麻呂姫の八九の莊院の程住して如意宝珠院の在りし時よりこの謹  
慎と旨とて苟且の里人と面と對を遮莫一莊園の主るれば名跡ありある  
べしと村長のいふもあれ世の憚りて楠を名告るも即地方の字を取て八九の姑麻呂姫  
とを唱せける今茲の家作程徒ふて事多るれば多くも暮て明れ忘十九年姑麻  
呂姫の年二八ふるの浮世の女子の春の日に銷しつる花と云ね鳥さ愛る習俗ある  
姑麻呂姫の無誓う起臥毎不ゆかり我身仙嬢別とまのりといふも五稔まのり  
けり量裏の師恩と戴して正可の怨敵義満を射て仆たられども劍術を其那身を  
傷らざる折送せ返矢の多近臣某甲們の合秘せしと云え人の知るに據  
もあらず実の我做せしるも今や夢の似てかたえせん證據もなき疑ひまの



命ん允さるる念と尋思の腑と固りて氣色も見えず二月の向盡と一  
 候有一日縫殿と維盈を側へ招き却りて我身総角るり比と亡父母の  
 野山詣んと夢起りたれば獨り路るねばも黙止せしむ續て兩夕  
 るる心小かる夢とされれば今茲那山詣て宿願も果すと云ふる頻り  
 るる心と這美と告る其頭の準備とせりて是は誘れ縫殿の維盈  
 沈吟と直と昭火と御野望餘義多しと又折ゆり取抄嫩と身中旅  
 宿は不測の殃危あは後悔其果未達と稍年来るるあは城君と欲りて  
 悄々茶擇とて宜しと野因とるる就ても御旅の世の妙えあはるる  
 止るる苦りて只顧諫と縫殿の痛も有けりそれと詞を添て只云と慰  
 めけり倦て已るるねば姑摩姫とる次第又件の姪母夫婦不起の  
 大く諫められし我意と推さるる女子の封疆とて教誰の知るる世

命ん允さるる念と尋思の腑と固りて氣色も見えず二月の向盡と一  
 候有一日縫殿と維盈を側へ招き却りて我身総角るり比と亡父母の  
 野山詣んと夢起りたれば獨り路るねばも黙止せしむ續て兩夕  
 るる心小かる夢とされれば今茲那山詣て宿願も果すと云ふる頻り  
 るる心と這美と告る其頭の準備とせりて是は誘れ縫殿の維盈  
 沈吟と直と昭火と御野望餘義多しと又折ゆり取抄嫩と身中旅  
 宿は不測の殃危あは後悔其果未達と稍年来るるあは城君と欲りて  
 悄々茶擇とて宜しと野因とるる就ても御旅の世の妙えあはるる  
 止るる苦りて只顧諫と縫殿の痛も有けりそれと詞を添て只云と慰  
 めけり倦て已るるねば姑摩姫とる次第又件の姪母夫婦不起の  
 大く諫められし我意と推さるる女子の封疆とて教誰の知るる世



徐折と云ふは。只折れぬる今番の起約一日もあらずまほし。と云ふ維盛再議  
 及びこの日よりと縫殿共侶の逆旅の準備を急ぎなれば幾日あつても東西整置折  
 うる夏の筆先日といふ永く暖氣の旅の究竟の氣候に伴ふ隅屋維盛と彼岸と  
 吸做を奴僕に心さる老実るを總一名従へて轎子に二三里の程農僕們の昇去を  
 其里よりと先づ驛奴と央んとて王従三名を天末明紀の略と投て立寄り後ひ  
 白く夫留る妻も。あらずあつて別を惜まざる心盡すといふは一家見る奴  
 婢までも立盡す目送りの首途の光景さであらんと。緯煩げれば寫も盡き看官  
 宜く猜まし。時志永十九年夏四月初旬。第二集巻の五の八を云ふ。小六が鳥羽の港  
 姫の高野の山と投てく。一日あつて素素よりその志菩提の與ふあつれども。あつれ  
 ようあれ日敷と縮り路次と急ぎて高野山に詣る。小女人林示断の山に女人堂は  
 巡礼と。林鹿下らんとせ折れ維盛耳其を。先考京師で戦歿せし折由縁は。

古麻呂飛  
 の樹を  
 のて京師  
 行高  
 野山に詣  
 師へ赴く  
 王に遠く  
 似たる  
 巻の具

亡體と花井とあつてせざるあつて。今番の旅宿の序次小索して拜多と云ふ  
 去向のあらぬあつれか。と云ふの理のまれば維盛異議も。現古殿の処墓在下當  
 時の風聲ふら。夢知ての折を詣り。詣んと。久くあつれ折るふと。然  
 死伴仕ると。答て京へ。俱へ。小程は姑麻呂姫。又二音旅宿と。京師へ  
 赴は。歇店と。下りて。その次の日。父正元の墓と。索て。参詣を。標石の。苔も埋れ。是。飲  
 必。たる。る。形。を。搔。拂。ひ。水。と。沃。死。草。草。と。向。て。王。僕。ひ。と。く。回。向。時。を。程。く。哀  
 慕。懐。昔。の。涙。の。生。憎。み。と。あ。る。落。て。その。面。影。は。さ。う。も。人。詣。ね。墳。荒。れ。く。  
 白。楊。と。つ。つ。風。不。戦。論。狐。兔。系。樓。と。云。ふ。萬。夫。と。欺。く。勇。將。義。烈。も。大。刀。折。れ。威  
 力。究。り。て。死。と。千。載。の。恨。と。送。る。四。大。の。壞。小。婦。れ。も。昔。名。の。雲。の。上。ま。も。隠。れ。る。日  
 記。で。弥。倍。の。姑。麻。呂。姫。の。意。東。今。番。這。地。を。來。り。ける。怨。敵。足。利。義。持。と。數。捕。ん  
 と。あ。ま。在。り。願。ひ。尊。靈。力。と。勸。し。て。本。意。と。遂。さ。せ。る。と。念。と。徐。身。を。起。す。

方小跪居一維盈事情と知れども憂ふ漏ぬ袖の露うち拂へる結陰の迎  
る也と天と眺々惘然と主未跟てを又故の歌店と投て急げける。是よりして又姑摩  
姫の京師の昔跡名所を親てて還る去めども四五日逗留せし程の谷の行轡は  
内小坐して山水と眺め地理と考へ夜又悄悄地子臥房と出て室町將軍の花園の  
潜入ると二回小く。義持公の寢所まで案内を知らせられ方才迷憾るるべし  
と思決り又の夜の次の間小臥せける。維盈們が睡息と覗い先活人草と一莖腹  
まで刀劍の御宗と固く且仙術と準備と秘し措る身甲と合せし身を固  
めて先祖相傳の短刀の菊水と名づける長九寸五分多と抜放ちえり荒余と笑て  
鞆小收り腰小穿て呪文と唱へて外面勢と馳て一息間小室町柳營小赴て潜入  
ての義持公の寢所へ寄近着程の夜の丑三を過ぎしける話分兩頭這山皆洛外  
此紫野の大徳寺小名の宗純法師と二休と喚做る一個の沙弥あり。此は是後小

松帝の御落胤をりければその母卑しかりけり民間小降くと談生を剩母親を  
産後幾程もろく身故りけり。その故に親族相計てその子と法師とまじけれを五  
六歳より比より大徳寺へまかせり。まほ小這一休の菩提達磨の再誕也あり  
けり睿悟聰達凡るねば經典とて讀むるも。他宗といへも法ざるも。既に  
て大徳寺より宗曇花叟和尚を師と學び。出藍の誉れあり。あまのて教化別  
傳の止觀の密也。松風羅維目を友とて。魔佛本来空眼と用は。不立文字の坐  
禪の床の意馬心猿と鞭ちり。有漏無功德の塵と拂ふ一柄の拂子一枝の如意  
至る毛とよ祈る。月を指て指と忘れ花を拈て微笑む。蒲團上の工夫一草の西  
來意情景雨をり。棄却して八宗九旨と看破し。然るに這沙弥年少なれば  
上の公武貴族より下の村翁野娘まで尊信せざるものある。是より室町殿  
持。折々一休と屈招くを法談と聽聞し。或は局小對し茶と圍て成敗理乱れ

道理と向ふ。却説永壬辰夏四月中旬室町殿の如く一休を招請す。法  
 談の後田舎茶のけり。緯果て一休の局を退けて直参す。先より上と相  
 必死の死厄ある。御小心あれか。と云ふ義持。敬馬のひてをいふ。病難  
 仔細いふ。と問れて一休然い。御病厄ある。御凶相ある。今日今日  
 威殺氣見れ。且三番田をひて。二番をう。輪のひる石の不足の四目  
 四目は陰の數るれ。死門より一と死門入る。四と合され。その數八  
 劍難る。と疑ひ。幸い。の末局の二目。陽の屬を。輸るといふ。死門  
 象も。願ふ。今宵。三。勁敵ある。御寢所。張ふ。のやい。最も危く。未  
 示を智識の明断疑ふ。もあ。られ。義持。要時沈吟。と。を。免れ。と。再  
 れて。今宵の。情。地。御寢所。を。易。ゆ。不。優。と。恐。れ。る。拙。承。の。常。の。御  
 所。小。坐。禪。と。仇。尙。束。と。對。治。せん。這。美。勿。論。隱。密。と。究。竟。の。緝。捕。二。十。名。を。屏

風の左右伏措にて。榻捕し。のう。と。余。義。持。點。頭。て。且。感。悦。斜。る。近。原。の。徳。  
 と。機。密。と。示。し。部。と。定。めて。黃。昏。時。候。より。准。備。と。敷。一。休。と。留。置。て。別。席。で。御。食。  
 応。あ。り。の。徳。而。中。の。比。及。より。一。休。の。室。町。殿。の。常。に。寢。所。小。坐。禪。と。仇。の。事。と。程。  
 武。執。方。量。覺。ある。勇。士。十。名。二。隊。分。れて。屏。風。の。左。右。埋。伏。れ。眼。小。遮。る。の。あ。り。の。事。  
 捕。せ。んと。て。夜。と。俱。小。暗。號。と。定。めて。扣。え。り。案。下。某。生。再。説。姑。摩。姫。の。敵。中。の。徳。  
 る。備。の。あ。り。と。と。も。か。け。室。町。家。の。奥。深。く。潛。入。り。案。内。知。る。義。持。の。寢。所。の。紙。  
 門。踢。開。て。找。入。り。と。せ。一。程。半。尚。少。一。個。の。法。師。が。蒲。團。の。上。に。跌。坐。と。在。り。是。を。  
 心。を。訝。り。と。る。月。よ。く。見。と。踏。む。折。り。件。の。法。師。の。眉。間。より。白。光。颯。と。見。え。る。光。  
 姑。摩。姫。憶。い。も。眼。を。射。り。て。瞑。眩。と。兩。三。歩。兵。と。伶。竹。と。金。規。濟。と。一。度。の。組。  
 る。居。る。力。士。們。屏。風。の。左。右。不。見。れて。二。と。争。ふ。惴。雄。の。壯。伎。二。名。左。右。より。組。む。と。組。  
 せ。身。と。反。と。項。髮。廻。で。二。三。間。筋。手。と。拍。と。投。退。る。透。も。あ。り。二。三。の。力。士。を。寄



身を踢倒し捷惱を烈し本事の剽捷の女子に似ける大奮闘勇撓修煉も  
 身ひらき短刀抜く間もあつた力士の奮闘を競蒐る姑摩姫の物とせし  
 左木柱を右木當りて此も組せむ投伏々々咒文を唱へ形を隠して逃去んとせし程一休  
 多身を起して杖束を姑摩姫の喉に毛信とるて物々一息と短刀を日光と  
 抜くもえせむ七真額位で丁と敷る刃の光共侶一休を身と斜めと數珠  
 揮抗て姑摩姫の眉間と殿と打く姑摩姫憶ひて刃を捐て殿内居小控と伏せ  
 処を獲ちと罵る幾名の力士們一推累りて押へ索を被りけ登時宿  
 直の頭人より熊谷近江介満實宮下野満重們三之隊に力士を従へ寝所の  
 前後と守護と在り既にして癖者れ捕捕れをて找出て先一休道徳と賞  
 賛へ更小姑摩姫より向ひて賊婦何もの所欲あるてよの御寢所を犯し一休和  
 尚の法驗る由り大事に及ぶ大胆無敵言語同断意ふ必支黨ある姓

名を生り同惡と争招了せしかとの世も果ぞ姑摩姫の冷笑以疾視て半宵の  
 小人何ぞの我の南朝股肱の忠臣楠正成孫に河内守正元が嫡女八九の  
 姑摩姫と喚るもの足利の是君父の怨敵義満義持誓約の背に南帝を  
 給えまる。罪惡既極まるもとて父祖の送忠と嗣人與に今宵必義持の首  
 級と捕んとする。支成らざる天の命の它は義持の對面と具のん若  
 們が知るとあると敦圍猛く罵る満實満重怒不堪堪暗ら賊婦が廣言  
 骨と折れて支黨と招了する焦燥つて一休委時と推禁め姑摩姫より對  
 して烈女とての迷恨る怒と鎮めて所和女郎の勁勇あるれも行所平  
 かを雲恨と雲んと戦場は相益で旗と進め鼓と鳴く。鼓を果とて大功を  
 のめ然る何ぞ垣と踏穴隙と鑽り刺客夜姿の狀態と事とて假令怨復を  
 との。良將のせざる所勇士の恥とす所あるも我小和尚一休宗純を機と查と

將軍家小侍のまゝとせ和女郎と這果もつら勇婦を辱し與ふあ天道項は福  
 ま和女郎が行ふ所不正の罪ありみづる作す薛子あまあれも人を救ふ出家の本  
 意は因て今宵の將軍の大阨を救ひあせ明日は又和女郎の必死を救ふと先  
 よく這意といれよかと諭せ姑麻姫敬篤るるうち仰見ら頭を俯て羞て心を  
 ざりけら徳而宮態谷の両頭人の且姑麻姫と一室内に最も緊しく閉籠て居る方  
 士まら成を却一休と共侶よと君公注進を介程小義持公癖者ありと与え  
 よる近習と云く後へもろ眉尖刀と披と奥もた便宜の一室に發見掛て在  
 一とを終注進の趣とち所く縛の終ひ斜る一休と旁に徳と謝して天も明は我身  
 多る那賊女子姑麻とやんがふと所く是願ふ和僧を折もる當廳に淹  
 留して賞罰の助言ありと又他事もある仰まへ一休仔細いと心て次の間退  
 けら信り程の姑麻姫の屠所の羊は異なる一室ありても物と思ふ快隠形は

術とて脱去りる段も易て又義持と敷も果えんと尋思とて數回件の咒文を  
 唱ふ此も驗るる一とあふふと訝とてはと思惟る小僧高丈仙嬢の寧ろ箴を  
 送り仙書と燭て再術を弄ぶ禍害あんと宣ひを理りるまと必も我北山の  
 復讐言の化現や人不知れを我々疑ふむらりる小義持も亦親おとく南北  
 御合體の誓言約を背て今茲當今の御受禪も又義持が計ひ京して小倉宮  
 退けらる當今の一の皇子と皇位お即けらるると世の風般とやふま最朽  
 をく堪らねば恩師の教誨も恃りぬ罪尋らると知りるる又劍術を行ひ敷  
 ち欲せ仇の與ふ竟は這身を囚れて信縲縛の辰すあるのみづる作す薛子あ  
 師の誠も恃り一所以然はそあれ今隱形の術を行くとるま行れも維我術破れ  
 とも那一休と後らん小法師の議論と悪く救ふ形と隱脱去りて命と惜ひ似て  
 潔くも什麻一休お打れ故我術破れ致成り又仙嬢の逆今宵の命を救ふ



術と破りある彼をわらぬ彼然も仙嬢別れお位を折那四言四句と授けて過  
一必敗とあり即今宵の敗績一則一休之下の三句の何のやん思ひ合するや  
ども仙嬢の透教その言錯るも自業自得とのまの君父の與ふ心と盡してその成  
らむ死して己の豫覚期のうまれ歎くふ足らぬのさる然も知る及維盈縫殿們が  
年来忠る養育の甲斐もみけを送るの有敷糸は是も不便に就中維盈の旅宿の  
伴も立ちあがり主の先途はあまを悔もせん恨もせん這も多し那も多し疑も多し  
疑ひ過教師を受て恩と仇も身の終焉允さるると念ど死を待つ外はありけり  
却説その詰朝室町殿の姑麻姫と誅伐のふ就て詮議あり義持のさる姑麻姫の  
怨訴の趣と听んとて己牌の土主と共に支廳に出る前管領斯波義將入道管領  
斯波義教斯波義淳自山満家細川満元并西職七頭の評定衆這宅も有司  
數十名列を正左右分れて齊々整々と七侍坐なり既時分ふり空室町將軍

義持公の當廳の正面は此糸の幔幕と高く懸る金屏と背あり上壇は着のへど  
熊谷満実宮満重稟接と奉り先より相分れて縁頬の左右に在り速く下知を他  
へて徳々と叫れ力士三名姑麻姫と重繩被り牽出きて大床近く推居る登時管  
領自山満家の列をさるれて杖と出姑麻姫より向ひて夜敷き意趣を鞠れ姑麻  
姫怯る氣色も言朽れ鞠問る忠孝の國家の樞要我身女流はあられも父  
祖の忠義を兼嗣て室町殿と敷手果えとて一外他事あるを満家も笑ひて  
是れ小南北相分れて戦ひ間を折るる状も怨のありもせぬ今南北御合體ありて  
足利家の徳澤と戴きとりのるれば和女も亦是室町殿の民をの民とて上を犯共是  
則國賊必同惡の逆徒わんを餘黨と招きあて呵責の咎と免れよとのせも敢  
て姑麻姫の一声吻々と冷笑ひて疎遠の管領是れ小南北相分れて戦ひ間を折るる  
慮深く當時足利義満が請稟せ義を勅許しして數个條の契約束と定められ

即便三種の神器を當今に渡すので御受禪の受を行き、義満も義持の虎狼の  
心で改め、初の誓言を背き、今までも小倉宮を東宮に立す、あつた故に南朝は  
忠臣義士の齒を切り、義満義持が讒妄權詐を恨み、怒り、任然に南北の御和  
順も今その甲斐あるに似たり、誰か足利一統の天下と見え、我身生れて、東  
西を知る比、父の戦殺君の御不幸、少くも就死する不就、怨骨髓を徹り、堪えられ、京  
臥し、干し枕の習記を、神符前を、義満を射て、侍せ、かゝる人知され、嘆き、義持  
も撃果して死んと決り、成らぬ、天命を素より同志の士卒に、心より身  
ひらき、大事を起さ、鐵門重辟、夫れ、かゝる這柳營、潛寄り、獨力に重んず、是  
より外は、公を、快々、頭を、刎ぬ、世に在る程、隙を、鼻息無慙の、大逆賊、終、  
多知せんを、飽きて、罵る、義烈の、怨言、側せ、有司、胆を、冷し、古を、巻きて、送、面を、  
睨み、たり、義持、主の、姑摩、姫の、權威、不屈、臣敵の、過言、治、堪、義持、口、近、着て

彼も、賊婦が、尾、酒の、悪言、許さ、死、快、牽、か、八、創、斬、切、て、後、徵、甘、満、家、  
拷問、の、最、多、寛、一、と、怒、め、義、將、美、之、諫、る、中、御、証、實、不、然、と、多、死、活、を、知、る、  
賊、と、も、一、個、の、婦、女、子、且、他、が、昨、夜、更、蘭、て、御、所、へ、潛、入、り、る、什、麼、天、の、降、り、飲、又、地、  
も、漏、れ、飲、進、退、共、奇、怪、之、知、る、言、語、應、對、絶、て、女、子、の、氣、質、を、必、是、地、狗、天、狗、  
も、その、那、身、を、準、て、狂、の、言、飲、是、由、亦、知、る、か、任、身、許、の、癖、者、二、日、元、怒、り、不、任、  
と、再、度、の、詮、議、を、及、び、七、矢、庭、に、死、刑、不、處、一、の、世、評、い、く、は、只、寛、仁、の、御、沙、汰、と、あ、  
ま、ほ、れ、と、宣、い、か、義、持、絶、不、點、頭、で、然、り、の、所、に、死、す、の、受、も、宣、せ、甚、麼、を、と、駭、か、  
向、て、義、將、の、雲、時、頭、を、傾、け、最、愚、按、あ、い、へ、も、大、德、寺、の、一、休、の、年、少、な、れ、博、識、宏、  
才、の、道、徳、を、世、以、知、れ、幸、以、昨、夕、留、め、れ、て、今、る、御、所、に、一、休、の、云、と、御、商、量、  
あ、り、ま、す、と、為、さ、る、と、あ、わ、べ、の、受、い、く、と、真、実、立、る、一、老、臣、の、當、座、に、意、見、を、義、持、  
を、怒、解、け、然、り、賊、婦、を、獄、舎、に、殺、せ、再、度、の、詮、議、を、依、り、衆、皆、自、の、意、と



